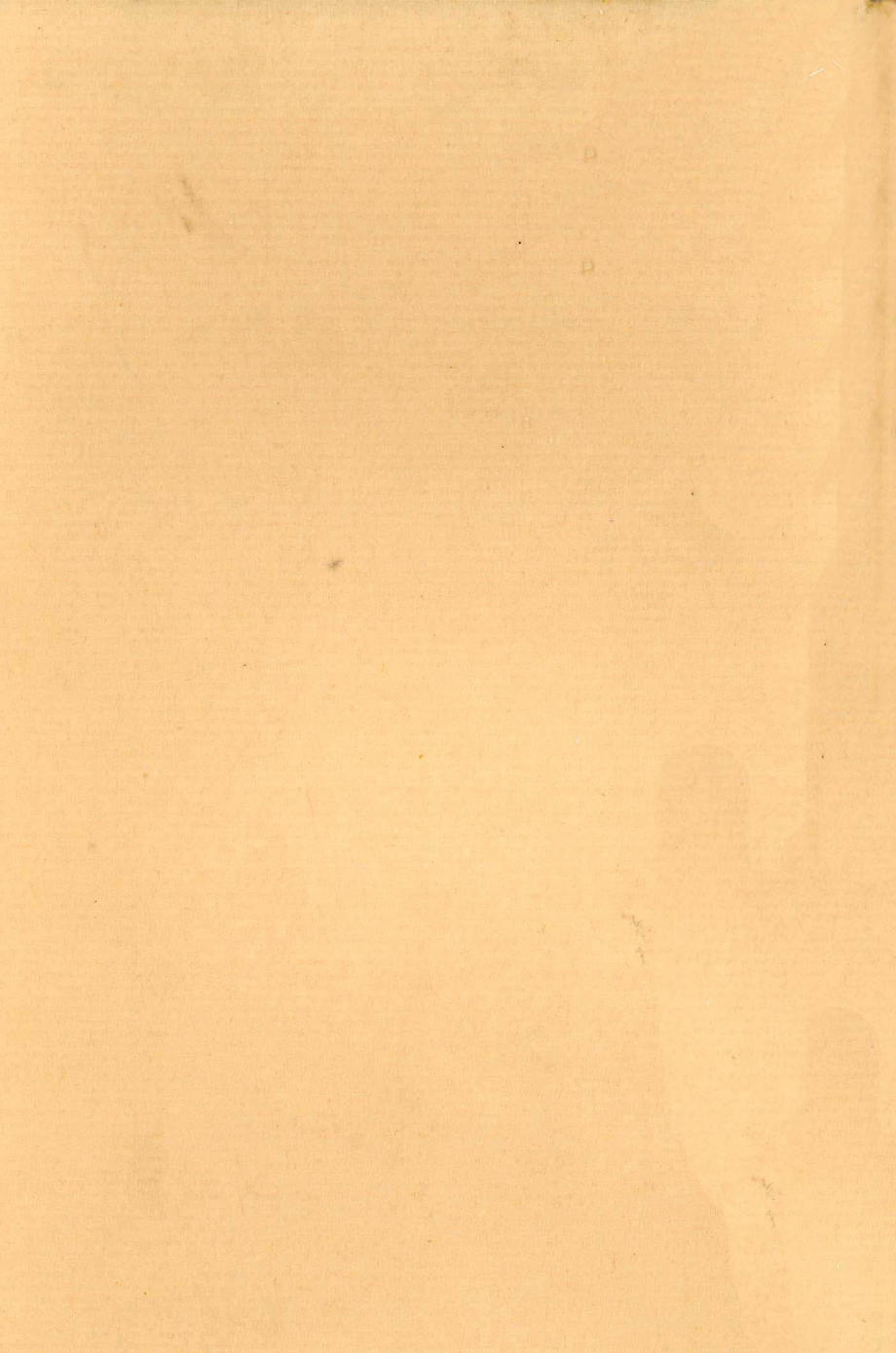




小島政二郎著

私の好きな川柳

彌生書房

©1982

検印省略

私の好きな川柳

1982年1月30日

初版印刷

1982年2月10日

初版発行

著 者

小島政二郎

発行者

津曲篤子

発行所

株式会社 彌生書房

東京都新宿区中町18 電話・東京(260)3707(代表)

印刷・太陽印刷工業(株) / 製本・大口製本印刷(株)

定価はカバーに表示してあります

落丁・乱丁本はお取替え致します

0095-82010-8525

私の好きな川柳

慶応の文科で、「江戸小説史」の講義をしてゐる時、何のはずみでか、川柳の話をした。当然「武玉川」に触れたのが始まりだった。

川柳は俳諧の「前句付け」が始まりだといふ。「前句付け」といふのは、「切りたくもあり切りたくもなし」(十四字)といふ前句に対して、「盗人を捕らへて見れば我子なり」(十七字)といふ付け句があり、仕舞には前句を略して付け句だけで独立したのが川柳と呼ばれたのだ。

柄井川柳からゐといふ作者の名が川柳といふ作品の名になつたのだ。

何もかもみんな略すとして、慶紀逸けいきいつといふ人が付け句だけで独立した川柳を集め

て「武玉川」を編輯したのが寛延三年（一七五〇）といふことになつてゐる。「武玉川」十五編で完成したのが、宝暦十一年（一七六一）で、十二年間を要してゐるのである。

「柳多留」の初編が出たのが、明和二年（一七六五）といふことになつてゐる。

「柳多留」の川柳は、底が浅くつてつ、まらない。川柳は俳句と同じで、古いほど面白い。「武玉川」の方が遙かに文学的で面白い。

ここに集めた私の好きな川柳も、ほとんど「武玉川」からのものだ。

しかし「武玉川」も俳句に比べると、余程新らしい。元禄の次が、

宝永が七年

正徳が五年

享保が二十年

元文が五年

寛保が三年

延享が四年

これだけ挟まつてゐる。この間に五代將軍の綱吉が、九代の將軍家重いへしげになつてゐる。

「元祿でなければ——」

室生犀星が俳句のよしあしを語るのに、この一言をスタンダードにしてゐた。

芥川龍之介も、全く同意見だつたが、犀星程田舎者でなかつたから、犀星ほど頑固でなかつた。つまり、室生に云はせれば、芭蕉以外の俳句は一切認めないのだつた。芥川に云はせれば、それでは余りに眼界がんかいが狭過ぎる。天明時代の蕪村も、几董きどうも、太たい祇ぎも、十分認めるに価あひする作家である。当時の俳壇を、もつとパースペクティブに見ようとしたのだ。

室生にとつては、そんな心の要求はない。たゞ、芭蕉一人あれば、その他の人は一人もいらぬのだ。室生自身には損かも知れないが、損でもいゝのだ。芭蕉だけ

あれば、その他の人々はゐなくつてもいゝのだ。さういふ田舎者の目の狭さ、頑固さが、あべこべに彼を救つてゐるのかも知れなかつた。

この目の狭さ、頑固さが、例へば目の広い、柔軟な感受性を持つてゐる芥川よりも、室生独得の仕合せを実にヨリ深く、ヨリ楽しく味はつてゐるのだと思ふ。芥川のやうにパースペクティヴに見ないで、自分の狭い視野で彼流に味はつて十分に満足してゐるのだ。鑑賞家としては不十分かも知れないが、不十分でいゝのだ。他面、室生流の独得の十分さがあつたのだから。第一、鑑賞家としての見識なんか、彼にとつては一顧の価値もないのだ。創作家の彼に加へるものさへあればそれで十分なのだ。彼は飽くまで創作家として立つてゐるのだから、創作家の頑固さだから、頑固さに価値があるのだ。芥川のやうに創作家であると同時に、鑑賞家として二本足を持つてゐないのだから。

創作家としての一本足で立つてゐる特権を持つてゐるよさである。それ故の頑固さの尊^{たう}さである。それでなければ、恥ぢずにゐられない頑固さである。変な云ひ方だが、無欲の徳と云はうか。一途^{いちづ}の無欲のよさと云はうか。

この頑固さを私自身の問題にすると、欲が多過ぎて左右に目を配るために、室生ほど一途になれないのだ。彼の頑固さを羨ましく思ひながら、都会人の悲しさに芥川流にあつちも分り、こつちも分り、小さく一徹になれないのだ。私の気の弱さの原因はここにあるのだ。芸術家が一徹になれずに何なんになれるのだ。

云つて甲斐のないことだけれど、室生の頑固さがなくて、どうして芸術家になれるのだ。

都会人は誘惑に弱い。芥川程才能に恵まれながら、さまざまの誘惑に惑まどはされて、頑固に自己を守り通せなかつたではないか。彼に比べると、同じ都会人でありながら、谷崎潤一郎のふてぶてしさを思ひ出して見よ。

鑑賞家としては、芥川の態度が本当だ。しかし、小説家としてだけで、鑑賞家としてなんか問題にしてゐない室生は、室生の小説家としての勤で好き嫌ひを云つて一向差支へないのである。室生に「芭蕉論」の著述があるが、芭蕉論としてどれ程の価値があるかどうか知らないが、室生はそんなことは眼中になかつただらう。ただ偽りない彼の見た芭蕉を語つただけのことだつたらう。論になつてゐたかどうか、

昔読んだままだからそれももう忘れてしまった。語らずにゐられなかつたことを語り論じたまでだつたらう。人の思はくなんか、どうだつてよかつたのだらう。自分の肥やしになりさへすれば。

外にもう一人、久保田万太郎といふ旋毛^{つむじ}まがりがあるて、一口口に云つて芭蕉のやうな大物^{おほもの}が嫌ひで、マイナーな詩人だけが好きだといふ人がゐた。みんなが元禄、元禄と云ふ中で、万太郎一人は天明も、太祇^{たいぎ}といふ余り人の知らない俳人が好きで、この人に——坊さんで云へば、この人の部屋へ行つて参禅したのだ。参禅して出て来た彼を見たら、立派に悟りを開いた人物になつてゐた。

私に「俳句の天才——久保田万太郎」といふ本があるから、詳しくは読んで見て下さい。悟りを開く道はいろ／＼あるところが面白いのだ。

俳句の大本山^{だいほんさん}は芭蕉だから、誰も彼も大本山へ参る。大本山へ参つたからつて、誰も彼も悟りを開いて下山^{げざん}するとは限らないけれども。

芸術の面白いのは——むづかしいのは、この辺にあるのだ。正直に云つて、悟りを開くのは師匠はいらぬのだ。名前を忘れたが、二人の禅の方の坊さんが仲よし

になつた。一人の方が先輩で、一人の方が後輩だつた。一緒に旅をしながら、後輩の方がいろ／＼悟りの道を尋ねることになつた。

すると、先輩が云ふのに、

「あなたのやうにさう質問なさつても、悟るのはあなただから、あなたに代つて私が小便をして上げる訳に行かぬ。あなたがお腹が透いたからと云つて、あなたの代りに私が御飯を食べて上げる訳には行かぬ。あなたの代りに私が眠つて上げても、あなたの眠りの足しにはならぬ」

ここまで云はれた時、後輩の頭に閃くものがあつた。

これでいゝのだ。大本山へ行つても悟れない人もあれば、こんな末寺で悟る人もあるところが、悟りの摩訶不思議さだ。

小説家は悟らうなんて思つてゐる人は一人もゐなかつたと思ふのだが。一生懸命に小説を書いてゐるうちに、相手にしてゐるのが人生だから、ひとりでに人間の——人間の生き方、人間の一生を見てゐることになる。いろんな人間が、いろんな生き方をしてゐる。最後にはみんな死んで行くのだが、それこそ千差万別の生き方

をしてゐる。少し大袈裟に云へば、それ〴〵個性のある生き方をしてゐるのだ。小説家にとつて、個性くらゐ興味のあるイキモノはない。中でも、強烈な個性に最も心を引かれる。さうして書く。

書くといふことは、その個性と親しく付き合ふことだ。好きになれない個性があれば、それ程でなくとも、どうにも親しくなれない個性もあり、反対に永く付き合ひたくなるよき個性もあり、個性くらゐその人間を語るものはあるまい。一般的に云つて、好かれる個性を持つて生まれて来た人は仕合せと云はなければならぬ。イキナリこつちへ来るものは個性だから、隠すことも、ごまかすことも出来ない。小説家は、殊に癖の強い個性と付き合はなければならない商売だから荷が重い。しかし、その氣になつて付き合へば、癖の強い個性程面白いものはない。

江戸のお師匠さまは、まづ上方かみがただつた。上方からいろんなものを仕入れてゐるう

ちに、おひく江戸的のものが生まれて来た。関東者は荒夷あらゐと云つて輕蔑されてゐるうちに、江戸三百年の泰平の御代みよが続いて、いやでも徳川幕府が政治の中心になるにつれて、上方の文化が次第次第に江戸へ移つて来た。

その移り方も、生優なまやさしい移り方ではなく、大阪の商業まで江戸に支店を設け、近江の、伊勢の、遅い商魂が、首都化した江戸を見捨てて置く訳がなかった。儲けは江戸にあると思ひ極めた彼等は、全力を挙げて江戸を食ひ物にし始めた。幕府のある江戸が、京都に代つて首都になつた。京都に代つてと云つたのは修辭的な云ひ方で、本当は大阪に代つて金の中心地になつたのだ。

金と共に、文化も江戸へ江戸へと移動し始めた。一ト口に移動し始めたと言つたが、義太夫のやうな複雑で濃厚な語り物は、江戸ッ子には消化し切れなかつた。物語のあるものは、江戸ッ子向きでなかつた。清元きよもと風の底の浅い歌ひ物が江戸で生まれた。物語があつても、せいぐ常磐津程度までだつた。本当を云つたら、端唄はうたや歌沢が江戸ッ子の好みに叶かなつたものだつたのだらう。私は音楽のことはズブの素人で、皆目分らないのだが。

江戸の始まり頃までは、上方に倣つて俳句も連句が流行したが、御存じのやうに百句、二百句続くのはざらだつたが、そんなに息の長いのは江戸ッ子の好みに合はず、「歌仙」と云つて三十六句で完成する短いものになり、しまひには、連句の最初の発句だけを独立させて一句を俳句と称して喜んだ。

何でも、江戸ッ子は短いのが好きだつた。上方の人は息が長く、江戸ッ子は極端に息が短かつた。江戸に来ると、何でも短くなり、長くなつたものは一つもない。着物も帯も短くなり、七五三分廻しと云つて、短い程意気だと云つて喜び、ゾロリと裾の長い着物を野暮だと云つて軽蔑したものだ。帯なんかも、しまひには「三尺」と云つて短いのを喜んだ。三尺と云へば、一ト廻りしか腰に廻すことが出来まい。そんな不便な帯を締めて何が意気なのか。

ここで上方といふのは、京都大阪をさして云ふのだが、京都の女の化粧はコッテリとしてゐる。没個性的だ。江戸ッ子はあんな化粧を喜ばない。生地きぢのイキ／＼した、表情のハッキリした、どつちかと云ふと、素顔を見る楽しみの化粧をよしとした。つまり化粧で素顔のよさの消えてしまふ化粧を嫌つた。甚だしい深川芸者に至

つては、全然お白粉しろいを使はない素顔の美を美の第一とした。などと云つても、その頃の深川の芸者なんか一度も見たこともないのだから、右のやうな記事を何かで読んだだけのことに過ぎない。大変心細いことだが、とにかく深川芸者は素顔の美しさを売り物にしたといふだけの知識の又売りまたうをしてゐるのだ。でも、私の知つてゐる数寄屋町まじの芸者の中には、さういふ心意気を大事にしたのがゐたといふ噂だ。噂だけで、本当のことはよく知らない。

私は不幸にして、京都の女、大阪の女に惚れたこともなければ、惚れられたこともないから、上方の女の話をする資格はない。だから、上方の女の情じやうのこまやかさに酔つた楽しい体験もない。人の話を聞いただけの悲しい耳学問に過ぎない。いや、耳学問とも云へない哀れな情報蒐集家だ。

その点、江戸の女は化粧もアツサリしてゐるが、情もアツサリしてゐる方らしい。江戸に大阪、京都のやうに心中沙汰が少ないのも、そのせらだらう。江戸に死ぬの生きるのといふ恋愛沙汰が少ないのは事実だらう。娘の恋愛はあつても、人妻の、年増女の濃厚な恋愛は、江戸には例が少ない。

上方の人の肉体と、江戸の人の肉体とでは出来が違つてゐたのではあるまいか。上方と江戸とでは食ひ物が、どう違つてゐたか詳しくは分らないが、（これから先きは全部私の想像だが）江戸はアッサリしたものを好み、上方は濃厚なものを好んだのではあるまいか。江戸はアッサリした豆腐を好み、冷^ひやヤッコとか、せいぐ寒い時にも湯豆腐とかを賞味してゐたらしい。

江戸時代の話をしてゐる時に、明治大正の久保田万太郎の話を持ち出しても何の証拠にもならないが、

湯豆腐やいのちのはてのうすあかり

こんなものを食つてゐたのだらう。それに比べると、上方ではもつと濃厚なものを食つてゐたのだらうと思ふ。何か江戸生まれと上方育ちとでは、食物的に云つて全然——と云ふと、云ひ過ぎになるが、上方の人の方が、比較にならないくらいうまいものを食つてゐたのではないかと思ふ。肉体の出来が違つてゐたのだと私は云ひたいのだ。